

第8節 しろくらべら種苗生産

鹿児島県では1994(平6)年度から奄美群島振興調査事業に、奄美海域における栽培漁業の対象種として、雌雄判別が明瞭で、生け捕り可能なシロクラベラを取り上げ、これの種苗生産を目的に、親魚養成技術の開発と、採卵技術の開発試験をはじめた。

1. 沿革

1) 鹿児島県における種苗生産技術開発の経緯

1994(平6)年 11月には奄美大島の全漁協を対象に、栽培魚種としての地元要望を調査し、23余種あげられた中から 要望の多かったシロクラベラを選出して 種苗生産のための親魚養成を始めた。

初年度は1995(平7)年2月15日に笠利湾で10尾(雌雄不明)を捕獲した後、当地先海面で一時蓄養後県栽培漁業センターに搬送した。輸送はトラック輸送(5尾/槽を収容・酸素と空気の併用・フェリー上では給水栓利用による流水)また、トラック輸送では、輸送終了1時間前からフラン剤5ppmによる薬浴を行った。

しかし搬入後の3月23日(36日後)には供給海水の中にガス病が発生して9尾がへい死し、さらに、4月25日残り1尾もへい死した¹⁾。

1995(平7)年 県栽培漁業センターでシロクラベラの親魚養成と採卵技術の開発を継続実施した。

親魚：1995(平7)年4月～1996(平8)年3月までに3回(1回：5尾、2回：10尾、3回：3尾)にわたって、笠利湾で追い込み網で捕獲したものを、当地先海面生費で一時蓄養後、県栽培漁業センターに搬送した。輸送方法は2回トラック：3回目1996(平8)年3月19日は航空輸送(固型酸素発生剤使用：1尾/20Lのポリ袋を発泡スチロール箱に収容)された。空輸の場合は、飼育容器に収容後フラン剤10ppm1時間の薬浴を行った。1～2回目の輸送によって魚体の擦れと、へい死魚1尾が出たが、この他は問題なく輸送出来た。

親魚飼育：1,9m²水槽1～2基で遮光し、シェルターを設置、飼育水には生海水・濾過水、水温は生海水・温泉加温水・注水量・注気等の調節、餌料にオキアミ・エビ・イシガニ・ムラサキイガイ・フジツボ・アサリ等を試行錯誤的に投与した。アサリに嗜好性を示したが、他の餌には示さなかった。

結果：1回目は擦れの悪化により2ヵ月半で衰弱死、2回目も同じく擦れの悪化により3ヵ月後までに3尾が衰弱死した。ほかの魚は摂餌、活力ともに良い養成経緯を示した。なお、養成途上で雄がへい死したため、採卵までにはいたらなかった¹⁾。

2. 種苗生産技術の現況と今後の課題

1) 種苗生産技術の現況

1994(平6)年度より種苗生産を目的に採卵親魚の養成を試みたが、餌付けをはじめ、飼育の環境馴致が不調に終わった。採卵親魚が確保されていない現状で、当面親魚養成と採卵技術を確立することが急務である。

2) 今後の課題

- (1) 採卵親魚の確保(雌雄の判別と適数確保・生アサリのむき身や、他の魚介類等の死餌への餌付けおよび飼育マニュアルの確立)
- (2) 初期種苗の生物餌料の栄養強化法と適型ワムシの探索
- (3) 飼育の環境整備・管理技術

3. 参考文献

- 1) 高野瀬和治・松原 中・平原 隆他(1995): シロクラベラの親魚養成試験. 平成7年度 鹿水試事報. (山口 昭宣)